

東アジアにおける
女神信仰の環流
— マリア・観音・媽祖 —

① 10:20~10:30

挨拶

上智大学教授 竹内 修一

② 10:30~11:30

マリアの不思議

九州大学名誉教授 関 一敏

③ 13:00~14:00

無限参照系の中の観音菩薩

元フランス国立極東学院東京支部 彌永 信美

④ 14:15~15:15

古媽祖像から見た
媽祖の伝播・融合・転生

天理大学国際学部教授 藤田 明良

⑤ 15:45~16:45

シンポジウム

(司会)上智大学教授 竹内 修一

6月22日(土)

場所 上智大学 中央図書館9階 921会議室

聴講券 一般:1,000円 学生:800円

事前販売 5月24日(金)~(当日券あり)

発売所

聖イグナチオ教会案内所(月曜休み) Tel.03-3230-3509

または 上智大学キリスト教文化研究所(土日祝休み)

(JR中央・総武線、地下鉄丸の内線、南北線 四ツ谷駅下車)

問合せ先

上智大学キリスト教文化研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

Tel.03-3238-3540

ホームページ: <http://dept.sophia.ac.jp/is/icc/>

東アジアにおける女神信仰の環流 ——マリア・観音・媽祖——

多くの宗教の成立・発展において、女性性あるいは女神の意義・役割は、看過することのできない重要な位置を占める。今回の講演会では、特に東アジア地域に焦点を絞って、以下のような三つのテーマを取り上げる。

第一講演は、「マリアの不思議」。マリアは、エフェソ公会議（431年）において、正式に①神の母（テオトコス）という称号が与えられた。これは、キリストにおける神性と人性の結合というキリスト論とマリア崇敬とが結びついたものである。その他にも、②「無原罪の御宿り」（1854年）、③「聖母の被昇天」（1950年）などの教理が公けにされている。②は、マリアは、母の胎に宿った時から原罪の汚れを免れていたというもの。③は、亡くなった後、マリアは、霊肉ともに天に挙げられたというものである。しかし、これらの宣言に先立って、民間レベルでは、それらについての長い信心の歴史がある。いずれにしても、マリアは、神と人間、あるいは天と地との仲介的役割を担っていると考えられる。

第二講演は、「無限参照系の中の観音菩薩」。観音菩薩は、大乘仏教の誕生とほぼ同時期に生まれ、広い地域に渡って、人々の信仰の対象となっている。とりわけ、中国をはじめとする漢字文化圏においては、多くの場合、女性神として信仰されてきた。一般的に、菩薩は男性とされる。それゆえ、観音菩薩は、ある意味で特異はケースだと考えられる。なぜ観音が女性化したのか、それについて容易に答えることはできないが、どのような条件のもとで女性化が起こったのかは、考察できるだろう。観音の神格像は、様々な影響の下で変化して行く。例えば、日本のキリシタンによって大切にされてきた「マリア観音」なども、その一例として指摘できるだろう。

第三講演は、「古媽祖像から見た媽祖の伝播・融合・転生」。日本列島に現存する古媽祖像は、二系統に分類することができる。一つは、16～17世紀における華人の移動・移住に伴うもの。もう一つは、18世紀以降の日本列島における信仰の展開（ローカル化）の中で作成されたものである。前者は、日本社会に帰化した華人や、琉球および南九州における船乗りの家門の守護神として信仰されていく。後者は、さらに、二つに分類することができる。まず、藩権力のもとで行われた寺社再編の中で始まった常陸の天妃信仰のように、船神だけでなく、修験道と融合して水神や二十三夜講の主神に転生したもの。次に、近世的な水上交通体系の成立に伴って顕在化するようになった船玉信仰と融合しながら、廻船の守護神に転生して契約儀礼の場に祀られていったものである。このような日本の媽祖信仰の展開は、16世紀後半以降、それが伝播する中国北部や台湾などと対照しながら、東アジア文化交流全体の中で捉える必要がある。